

新しい原理にある望遠鏡が将来にわたって創り続けられることを予感させてくれる。

最後に著者は、天文学をするのは「人」であると強調している。この本は自然の扉を開けるために新しい望遠鏡を創るそういう「人々」の物語である。自然科学に取り組む学者の心意気を感じさせる物語である。われわれ凡人は、ヘイルやワイルドのような巨人にはなれなくとも、少なくとも立派な計画に好意ある理解の持てるような洞察力を持ちたいものである。

筆者は本文中に个性的に出没され、本書はあたかもワンマンショーの感がないでもないが、ゲスト出演者たちに対しても良きエンターテイナーぶりを発揮している。個性あふれる久々の快著であると信ずる。

(平 林 久)

Geology and Physics of the Moon

G. Fielder 編

(Elsevier Publishing Company, 1971, 159 頁, 7,500円)

この本が出版されたいきさつは、フィールドアの序文によれば、1970年の10月に、ロンドン大学天文台のフィールドアを中心とする月研究グループが、ランカスター大学の環境科学部に移動して、新しい研究チーム(月・惑星ユニット)を作った。その段階で今までの研究をまとめて発表しておくことが必要となつて、この本が出版されたという。いわばフィールドア一家の「引越しそば」である。

フィールドアといえば、地質学方面の深い造詣を生かして、月の地質学の分野で、このような特殊な方面の研究者が現在は少いという条件もあって、まるで一人舞台と言うような研究を行なっている異色の研究者である。多くの場合、地質学者は天文学を知らず、天文学者は地質学を知らず、おたがいに勝手無責任なことを言うものが多い中で、彼の研究はこのふんい気の引締め役に役立った。

この書は11の章から成り、10人の執筆者が、ある章は単独で、ある章は連名で書いている。第2章のG. フィールドアと連名になっているJ. フィールドアというのは、夫人か御子息か、私は寡聞にして知らない。

この書の内容を紹介するのに、次の観点から紹介してみよう。すなわち、これらの研究の基礎となった資料は何から得られたのか、という観点である。まず第1章はフィールドアによる概説で、これはレンジャー、サーベナー、ルナ・オービター、アポロ、それにソ連のルナ

9号等によって得られた資料にもとづいている。ところが、第2章から第7章までの本書の中心部は、ほとんどもっぱらルナ・オービター4、5号による資料を基礎としている。第2章は雨の海に見られる熔岩流附近の火口統計(crater count)、第3章は月の雨の海附近に集中度が高い蛇行谷(simuous rill)について、第4章は海の中に見える熔岩噴出活動の状態についての調査、第5章はティコとアリストアルコススの熔岩流を調査し、火口統計の上から両地域には異なる特徴のあることを示している。第6章は月の裏側のツィオルコフスキーについてのくわしい調査で、これは衝突火口(impact crater)である、と執筆者のG. ゲストは結論している。第7章は月の火口の成因という題で、執筆者フライヤーは、月火口形成のメカニズムを、単独爆発、多重爆発、低速孔(この3種は外部よりの物体の衝突による)、崩壊、物質の噴出の5種にわけ、このいずれの原因による火口も月面に存在するが、ただどれだけの比率で存在するか、それらの原因の相互の関連はどうなのか、ということが残された問題であるとしている。第8章は地球からの測光観測、第9章は偏光観測、第10章は表面物質の化学的性質、第11章は月物質の熱的性質で、これらはフィールドア以外のところでさかんにやられていることなので、ありきたりの現状紹介の観が強い。

全体をふりかえって、ルナ・オービターの写真をもとにした形態学的研究が中心に据えられた本、という感がする。

(関口直甫)

掲 示 板

東北大学理学部天文学教室教官公募

下記により公募いたします。希望者の応募、適任者の推薦をお願いいたします。

1. 公募人員……教授1名
2. 専門分野……天文学
3. 就任時期……昭和48年4月1日の予定
4. 提出書類……履歴書、研究論文リスト
推薦書(他薦の場合)
5. 締切期日……昭和47年11月15日
6. 宛 先……(〒980) 仙台市片平二丁目1の1
東北大学理学部天文学教室

高 窪 啓 弥
(248 頁につづく)